３０－７　経営協議会議事概要

日　時　平成３１年３月１９日（火）15:00～17:00
委　員　駒田学長（議長）
　　志田，銭谷，西岡，向井，村本，渡辺
　　山本，鶴岡，尾西，加納，尾藤，伊藤　各委員
列席者　冨樫，野崎，橋本，西村，松田，堀，吉本，竹井　各副学長
　　服部監事，山中監事，緒方教授，梅川教授

◎新規委員等の紹介
　４月１日に理事就任予定の緒方教授，梅川教授より挨拶があった。

◎議事概要の確認
　３０-５，３０-６の議事概要(案)について，了承された。

Ⅰ　審議事項
１．２０１９（平成３１）年度学内予算配分案について
　尾藤理事から，「資料：審-１，参考資料１」に基づき，2019（平成31）年度学内予算配分案に関し，予算編成にあたっての考え方，収入予算及び支出予算とその内訳，部局別の教育・研究経費配分額，目的積立金を財源とする経費内訳，間接経費，並びに機能強化経費の事業別予算額についての説明があり，審議の結果，原案どおり承認された。

＜主な意見＞
○間接経費を前年度より少ない予算で組んでいるのは何故か。
→実際の予算額ではなく計画上の額であり，科研費の採択率などから調整して抑えている。
○間接経費を増やすためにも，研究費の獲得に努めていただきたい。
○民間は利益の変化が大きいのに比べ，大学の予算は安定しているが高望みもできない。収入を上げられるのは附属病院だけである。近年の大学は人件費が上がっておらず，モチベーションもあまり高くない感じがする。民間並みの経営を導入しにくいことは事実であり，国の予算が減れば大学の予算も減らされるが，それを補う方策はあるのか。
→教育・研究を行うことが基本なので，共同研究等を増やす方法で外部資金を獲得していきたい。また，共同研究の間接経費を引き上げるなど，外部資金を獲得し易くするための規程等を改正すると共に，外部

資金を獲得しようという意欲を教職員に持ってもらうことが必要だと考えている。共同研究を行っているのは全教員の約17%なので，実施者がもう少し増えれば件数や金額も増えると考える。企業のご協力やご理解をいただきながら，研究費を有効かつ大事に活用して，良い成果を生み出していくのが大学の使命だと考えている。

○附属病院の収入予算が前年度から14億円と大きく増加しており，内訳は手術件数の増，稼働率の向上ということである。手術件数については，対応可能な件数の増加を見込んだものか。

→手術件数については，500症例の増を目標としている。これは３億円に相当し，実施可能だが，かなり頑張らなければいけない数値でもある。手術の１症例当たりの大きさは様々であるが，2025年に8500症例と考えている。来年度は7500症例なので，1000症例を数年に分けて増やす計画である。手術室は16室あり，500症例というのはもう１室を稼働させるくらいの値である。これには麻酔科医と看護師の増員が大事であるが，共に充足してきている。

２．人事労務に関する規程等の改正について

尾藤理事から，「資料：審-２，参考資料１・２」に基づき，文部科学省人事の改革案が示され，国立大学法人との人事交流の改革において国立大学法人への理事出向を減らすという方針が出されたことを受け，非常勤理事及び理事ではない事務局長を任命できるようにするための規定等の改正，並びに国立大学法人等人事給与マネジメント改革に関するガイドラインに退職時に退職手当を支給する年俸制が示されていることを受け，年俸額に退職手当相当額を含めず，退職時に退職手当を支給する年俸制を導入するための規定等の改正を行う旨の説明があり，審議の結果，原案どおり承認された。

３．平成３１年度年度計画（案）について

尾西理事から，「資料：審-３，参考資料１・２」に基づき，平成31年度年度計画（案）について，年度計画の重点事項を中心に説明があり，審議の結果，原案どおり承認された。

なお，今後，軽微な語句の修正等については，学長一任とする旨の発言があり，了承された。

Ⅱ　報告事項

１．三重大学の広報方針の策定について

吉本副学長から，「資料：報-１」に基づき，11月20日開催の本会

議における意見交換を踏まえて策定した「三重大学の広報方針について（案）」の説明があった。

２．三重大学キャリア教育改革について

野崎副学長から，「資料：報-２」に基づき，前回報告した三重大学キャリア教育方針の策定に関し，今後のキャリア教育改革の対応の方向性についての説明があった。次いで，長屋准教授（学生総合支援センター副センター長）から，現段階における三重大学キャリア教育Webサービスの仕様についての説明があった。

３．平成31年度経営協議会開催日時について

学長から，「資料：報-３」に基づき，平成31年度における経営協議会開催予定日についての説明があった。

４．平成31年度執行部体制について

学長から，「資料：報-４」に基づき，平成31年度執行部体制についての説明があった。

５．その他

（１）次回開催について

平成31年6月24日（月）13：30から開催することを確認した。

Ⅲ　意見交換

１．三重大学における基礎研究について

鶴岡理事から，「資料：意-１」に基づき，三重大学における基礎研究についての説明があった後，種々意見交換を行った。

＜主な意見＞

○民間企業は，自社だけで研究することが難しい場合には，大企業を巻き込んで予算を確保している。スタッフの人数や何年間にどのくらいの金額が必要だということを提示して交渉する。

○三重大学が行っている研究内容が，あまり企業には知られていないと思う。これを上手に発信すれば，活用したいという企業が出てくるはずである。企業との接点を見つけるのはなかなか難しいと思うが，工夫や試行を重ねて発信するうちに，大学と企業とのインターフェースが見つかっていくと思う。質もそうだが繰り返し行うことも必要だと感じている。

→大学にあるものを外へ持ち出し，企業の近くで話合いや接点を持ちたい。フェイス・トゥ・フェイスであることが大事だと考えており，地域拠点サテライト等を活用して展開していきたい。

〇生物資源学部の資源循環学の野中先生の研究が凄いとその分野の大学教員から聞いた。現代は石油化学文明で大変な問題が起きているが，野中先生は樹木の繊維やリグニンという物質を原料として石油化学製品を凌ぐような製品を作っており，またその製品は地球環境にも良いという。そのような研究の第一人者だと聞いている。

→現在，森林化学の分野は研究者が非常に少ない。三重大学の母体の一つが三重高等農林学校であり，100年の歴史があって，森林化学分野の研究者が辛うじている。野中先生はその一人だが，先代の船岡先生もリグニンの研究で有名で，独創的な研究をしておられた。生物資源学部の森林化学の研究は伝統があり，全国的にも秀でていると思う。

→野中先生は粘土状の木質繊維から色々な形を生成するという研究をされ，世界的にも注目されており，NHKワールドというニュース番組で世界に発信された。近年，プラスチック製ストローの問題がクローズアップされているが，木質繊維でストローを作るという共同研究をされ，そこでも注目されている。

〇科研費の申請率を高めて採択率を上げれば間接経費の増加にも繋がるのだが，申請率はどのくらいか。

→今年度の申請率は81％であり，第３期中期目標の80％を達成した。

〇リサーチセンターには三重大学の伝統的な研究が集約されており，非常に良いと思う。重要な研究をセンター化することで大学の強みも明確になるので，このようなセンターを増やしていけば良いと思う。

〇これから三重大学が力を入れていく研究には，基礎的な研究であっても，意図的に研究費を多く配分して大学の目玉にしていくような，メリハリのある予算配分による支援方法もあると思う。

〇三重大学の基礎研究を支援する上で，産学官に銀行を含めた産学官銀といった連携も活用できればと思う。

〇基礎研究でも，例えば医学の分野は外部資金を獲得しやすいが，文系の分野はなかなか獲得しにくいところがある。しかし，非常に重要な研究があり，まさに大学が行わないと出来ないような部分だと思う。例えば，海女の研究はとても重要だが，社会的にはあまり研究されていない。そのようなテーマに三重大学が注目し，センター化して，リサーチセンターや地域拠点サテライトで研究するのは面白い。そういった強みを打ち出し，支援を厚くすると，研究者のモチベーションも上がると思う。

○自社で研究室を持って研究や開発をしている企業が三重県内に幾つかある。大学には，そのような民間の製品開発に活用できるような基礎研究がたくさんあると思われるが，大学でどのような研究が行われているのかが企業からは全く分からないのでコラボレーションができていないという状況だと感じている。

○まず，民間との共同研究については，基礎の部分は大学で行って応用の部分は民間が行う，といった提案をする機会をもっと作った方が良いと思う。そうしないと基礎研究自体が埋もれてしまうという懸念がある。次に，共同研究をする際に，国の研究開発関係の補助金や交付金を活用するという選択肢もある。もしかすると，基礎研究で，研究開発関係の補助金や交付金を活用しているものはほとんどないのではないかと思っている。それから，具体的に共同研究に結びつけていくことが大きな課題になるが，やはり三重大学が実施している研究内容を外部に発信していくことがスタートになると思う。基礎研究は，その上に色々なものが成り立っていくので非常に大事だと思うが，日の目を見るケースとそうでないケースがあるので，できるだけ世間に認められるように誘導していけたら良いと感じた。

○卓越型リサーチセンターの研究は歴史があり，非常に期待が持てる。また，テーマも分かり易い。地域拠点サテライトも，忍者や海女といった皆が非常に興味を持つ分野を研究している。これらの研究を，一般の方にもより分かり易く広報することが大事だと思う。広報においては，研究テーマにカタカナや英語が多いので，いかに分かり易く伝えるかがポイントだと思う。とにかく，卓越型リサーチセンターと地域拠点サテライトの研究活動は大変良いので，是非頑張っていただきたい。それから，科研費について，27年度以降の採択が上向きなのは良い傾向である。科研費の研究課題名が難しいのは仕方ないことだと思うが，幾つかの研究課題を分かり易く紹介すると良いと思う。

→一つは，大学として文系の研究は当然重要だと考えており，例えば科研費の研究課題に「グプタ朝以降のインド仏教の僧院に関する総合的研究」というものがあるが，そのような独創的な研究も行っていることをご認識いただきたい。もう一つは，卓越型リサーチセンターは理系ばかりだが，大学は地方創生を目指しており，例えば地域の街づくりを研究するということになれば，単独の学部ではできないので，文理融合のリサーチセンターを作らなければならない。現在，人文学部が歴史を踏まえた街づくりの研究組織を作ったが，そこへ工学部，生物資源学部などの専門性が合わされば地方創生を研究するリサーチセンターができるが，それが今はまだ欠けている部分だと思った。最後

に，教員から，教育・研究や管理運営業務に追われ，広報も科研費の研究も企業との共同研究もやりたいが時間がない，という声が聞こえている。そこで，特に優れた研究を行う教員には，教員のサポートをする事務補佐的な人材を配置し，それによって研究・教育に従事できるようにする方策も考えている。本当にそれが有効かどうかも検証しながら，進めていきたいと考えている。

○3月31日をもって退任する鶴岡理事，加納理事，尾藤理事，堀副学長，竹井副学長より挨拶があった。

以上